

# Fate/zero 【つらぬきの 騎士が召喚されました】

4 2 5 6 巻 き

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

デモンズソウルをしていた人間が死後、その世界に迷い込んだ魂は色のない霧に作り出されたデーモン、つらぬきの騎士にとなってしまうも満足な死を迎える、だがまたもや自分の知る世界の一つ、Fate／Zeroにてつらぬきの騎士となった者は呼ばれる・・・バーサーカーのクラスを得て注意、つらぬきの騎士が出る代わりにランスロットさんは出ませんそして本来の流れとは違ったり雁夜おじさんを助けたりもします  
更新頻度もまばらでしょうがそれでも構わなければどうぞ

# 目次

1話	それは理性的だった	1
2話	彼は望んだ	7
3話	つらぬき	13



# 1話 それは理性的だった

あるところに由緒正しき王家が統治する国があつた  
名はボーレタリア

魂を司るソウルの業を知り、それ故に滅亡へと至つた国  
今は怪物と精強な亡骸達の住まう居城と化している  
そしてそれらが起こす被害は他国へも徐々に広が  
その居城を潰そうと様々な素性の者達が向かい行くが  
誰一人として帰りはなく、かつての英雄の形を得た  
強き巨大な怪物が原因となつていた

塔の騎士

正に塔の如き巨大な体とそれを隠す程の大盾と長い槍を持ち  
単純な力押しや大軍などものともせず全て叩き潰した  
もはや誰もかもが武器を、心を折られ動かぬ中  
ふらりと一人の戦士が現れ塔の騎士に挑み始めた  
しかし相手は塔の騎士、幾度と戦士は死に目を見るが

決して折れず、何度も立ち上がり続け、何度でも学び続け

ついに戦士は塔の騎士を打ち倒したのだ

そして戦士は居城へと続く道を進み行くと

道を阻む次なる怪物と相対し、また戦士の挑戦が始まる

つらぬきの騎士

つらぬきと銘打たれた長大な直剣を使い、卓越した技量と剛力は

一振りですごい石像を砕き、一突きで重鎧の兵を五人刺し殺し

つらぬきの剣にソウルの光りが帯びれば全てを刺し貫く

このつらぬきの騎士に戦士は何度も倒されているのだが

ふとした事で、戦士はつらぬきの騎士が物言わぬ怪物達とは

根本的に違う存在であるのだと知った

なにせそいつは物を言うのだから

ジメジメと暗く、なにかが絶えず蠢く気配を感じる広い地下室にて

一人の男が地面に倒れ、血反吐を吐き、呆然と前を見ていた

「なんで、サーヴァントが出ないんだっ……！」

地面に倒れている男、間桐雁夜はサーヴァントが現れるだろう場所を見るも薄い霧が出てそれが室内に散ったただけだった

「( )までの段取りをして失敗とは．．．」

まあ一度で駄目なら二度目に望むまでの事よ」

少し離れた位置で浅黒く小柄な老人

間桐臓硯はこの失敗に焦った様子もなく話す

「だが未熟なお前がそう失敗を重ねられると思うでないぞ

なにせ、足りない魔力を虫と血肉で補っておるのだからな」

「このクソジジ．．．い．．．」

雁夜は苦痛に苛まれながらも臓硯を睨み、悪態を吐くが

それらを一時忘れるような異様な変化に気づいた

幾ら多くの蟲が潜み高い湿度であるとは言え

この蟲蔵の壁が霞んで見えるほどの霧が埋め尽くし

いつ、そこに居たのか臓硯の背後にて雁夜を見下ろす

巨大な人の形をした霧の塊に

「まさか．．．サーヴァントなのか」

「なんじゃとっ」

臓硯が振り返ると2メートルは優に超える

人の形をした霧の塊が音も立てず静かに佇んでおり

見た瞬間、臓硯はそれのなにかを感じ取り、理解した

これは英雄と呼ばれる人の一種などではなく

化け物と呼ばれる人に仇なすものであると

「ふうむ……予定していた物とは違ったが

そこらの英雄などよりも余程使い道がある」

そして臓硯の短き思考が終わると霧の塊は

倒れたままの雁夜の近くまで歩き、声を掛けた

【お前が召喚者か？】

男性と女性が声が同時に重なった奇妙な声色に驚き

雁夜は少し遅れて濃霧の塊に答える

「あ、ああ……召喚した」

【名前を】

「雁夜、間桐雁夜だ」

【雁夜か……ではこちらも名乗ろう】

そうやって霧の塊は腕を上げ、振り払うと



その体と部屋を包んでいた霧が一瞬にして消え去り  
頑強さ、美しさを両立させた鎧の騎士が姿を現した

【クラスバーサーカー、つらぬきの騎士

召喚者雁夜の生存に協力する】

倒れたままの雁夜に視線を合わせるよう

つらぬきの騎士は片膝を着き、手を差し伸べる

「え．．．ああ、起こしてくれるのか」

雁夜はその手を取り、体を起こして座り込むと

つらぬきの騎士が声を掛ける

【一つ、召喚者たるお前に問う】

「問うって．．．俺になにを問うんだ？」

【復讐を望むか、救済を望むか】

「！」

雁夜はこの言葉に思い当たるなにかあるのか

目を見開き、少くない動揺と警戒が見て取れる

【一つを選べ】

「選べって．．．」

【お前から強く感じ取れる二つの望みは

一つでなければ非業の先に果てるもの、故に一つだ】

「……………一つ」

【だがその前に実行すべき事がある】

ヒュ、と空を僅かに裂く音を後にどこから取り出したのか

つらぬきの騎士の背を更に超える細く長大な直剣が

歪んだ笑みを浮かべていた臓硯を既に刺し貫いていた

「……………召喚者の祖父であるワシにこの仕打ちとはな

一応、理由だけは聞いておこう、なぜにこうした」

刺された臓硯は平然とした表情で問う

【なぜ召喚者を短命にする要因を生かさねばならない】

つらぬきの騎士の手が青白く光り輝き直剣へその光りが流れ

剣の刺さった箇所を起点に臓硯の肉体殆どが光りに消えた

## 2話 彼は望んだ

雁夜は呆然としてこの信じがたい一連を目にした

霧だけが出て失敗したと思つた召喚は

その霧を纏い現れたサーヴァントを前に成功と知る

そしてサーヴァントは恐ろしく長い剣で臓硯を突き刺し

手と刀身が光つたと思えば臓硯は光りに削り消された

一瞬、良い夢を見ているのだろうかとも思うが

体を蝕み続ける蟲の痛みから夢ではないと自覚する

「臓硯は……死んだのか？」

【まだ生きている】

「あれで生きてるのか……」

臓硯の生存を残念に思いつつも雁夜は考えていた

油断していたとは言え、あの臓硯を軽々と刺し貫き

容易く葬つたみせたこのサーヴァントになら

自分が願う復讐か救済を本当に叶えてしまふかもしれないと

雁夜は現在このサーヴァントの契約主であり

三度限りの絶対的な命令権、令呪を持っている

そして余命が少ないであろう自分に

今できるかもしれない事を考えてしまう

もし臓硯を完全に殺し切る事ができれば

もし憎たらしいあいつをすぐ殺す事ができれば

もし……もし……

もしあの子を安全な場所へ連れ出す事ができれば――

「……バーサーカー！」

【……】

つらぬきの騎士は持っていた剣をどこかへと収め

臓硯の居た場所に向けていた視線を雁夜に向ける

対面して話しを聞く為に

「もし、この地下の地面が埋め尽くされるくらいの

蟲の大群が襲って来てもどうにかできるか？」

【できる】

それが当然と言わんばかりに迷いなく可能と答える

「こんな余命も少ない死にかけの俺を……

……)から生き延びさせる事できるか」

【できる】

「あの妖怪ジジイが来てもどうにかできるか」

【できる】

「小さい女の子を助ける事はできるか」

【できる】

つらぬきの騎士が雁夜の問いに答える度に

ざわりざわりと蟲の蠢き立てる音が増えていく

「なら俺が、俺が救済を望んだら……」

俺を救う為にあのクソジジイをぶっ倒してくれな!!」

【望むがままに】

つらぬきの騎士が雁夜の言葉に答えると

蟲蔵全体から蟲の大群が溢れ出てくる

「気をつけろ！そいつらは小さい隙間でも入ってくる上

牛の骨を簡単に噛み砕く奴や毒持ちもいる！」

雁夜から注意を掛けられたつらぬきの騎士は――

——なにも持たずに蟲の大群へ歩を進めた

「なっ、なんで剣を出さないんだバーサーカー!!」

そんな事をしたら蟲共を払う事もできなく!」

しかし雁夜の注意とは裏腹に蟲は襲い掛かるどころか

つらぬきの騎士が歩を進める度、逃げるように下がり続ける

そしてつらぬきの騎士を中心に薄く霧が集まると

それを嫌ってか蟲蔵から次々と蟲の大群は姿を隠して行き

見渡す限り、蟲と言えぬものはなくなっていた

「蟲共が、逃げた・・・!?!」

命令されれば猛獣にだって噛み付くあいつらが・・・」

ガシッ

「うお」

つらぬきの騎士は消耗して動けない雁夜を小脇に抱え

どこかへと歩きながら話す

【アリは草を喰らわず、イモムシは肉を喰らわない】

「え?・・・まあ、そうだな」

【だからこそ喰えぬモノとなれば噛み付きもしない】

雁夜を抱え、話しながら蟲蔵の出口であろう階段を昇る

「……つまりあの蟲共が喰い付けないのは

そうなるスキルかなにかを持っているって事か？」

【それで合っている】

「だから蟲を退かせられたのか」

階段を昇り終えたつらぬき騎士は扉を開け

ジメジメとした蟲蔵とは別の正常な部屋に到着した

【雁夜】

「なんだ、バーサーカー」

【これから一人の子供を救う】

「それはつ……分かるのか、桜ちゃんの事が？」

【助けたいと望む子供の姿が伝わった

だからこそ、間違いなく叶える為確認する】

つらぬきの騎士は問う

【その子供を救いたいのか】

雁夜は望みを答える

「ああ……救いたい、なにがなんでも救いたいッ!!」



## 3話 つらぬき

私は、明日が嫌い

ずっと眠っていたら苦しくないのに

起きて明日になったらまた苦しくなる

だから明日が嫌い

いつも苦しそうな雁夜おじさんも

きつとそう思ってる・・・けど

「桜ちゃん!!」

なんで、そんなに頑張れるんだろう・・・

「二階に行ってくれバーサーカー!」

【了解した】

小脇に抱えた雁夜の指示に答える為

つらぬきの騎士は両膝曲げてしやがみ込み・・・

「……どうしたんだ？階段はあつちに——」

ドツ！

跳躍すると同時に拳を突き上げ

ドツ、ゴオオン！！

一階の天井を殴り抜いて二階の廊下に到着した

【着いたぞ】

「な……なんて行き方をするんだお前は!？」

【近道をした、次はどこだ】

「近道って……次は絶対にやるなよ！

なにも壊さずあそこの部屋に入ってくれ！」

それを聞くとつらぬきの騎士は廊下を駆け

指示された部屋の扉を壊さず開いた

そこにはただ静かに俯く幼き少女が

間桐桜の姿がそこにあつた

「桜ちゃん!!」

「雁夜、おじさん……?」

雁夜は自身を抱えるつらぬきの騎士から離れ

時折ふらつきながらも桜のもとへと行き着いた

片膝を地面に着き、視線を合わせて桜に語る

「助けにきたよ、桜ちゃん」

「私が・・・助かるの？」

「ああ、助かる」

「・・・そっか」

雁夜は力なく答えるを桜を抱きしめて

言い聞かせるように話す

「もう苦しまなくていいんだ・・・!!」

もう誰にも桜ちゃんが苦しむ事なんてっ

「やっつと、終わるんだ」

「?・・・桜ちゃん？」

「ずっと眠っていてもいいよね」

「なにを言って・・・」

抱きしめていた手を緩めてその顔を見ても

桜は顔を向けず、雁夜ではないどこかに話し続ける

「もう起きなくてもいいよね・・・」

私を……終わらせてくれるよね」

「バーサーカー!!桜ちゃんを早く安全な場所に——」

あまりにも危うく感じる桜の言動を不安に思い

雁夜はつらぬきの騎士に声を掛けつつ振り返り

「その剣で——私を殺してくれるよね」

つらぬきの騎士がああ長い直剣を両手で構え

桜を正面に捕らえていた

「……なにを……しているんだ?」

「……」

「なんで剣を向けているんだツ!!」

雁夜の叫びに答えずつらぬきの騎士は体の向きに変え

剣先の桜に向けたままその反対に両腕引く

全力の突きを放つ、言葉せずともその意思が伝わる

「やめろツ!……やめろよバーサーカー!!」

「この子を救ってくれるんじゃない——」

【雁夜】

言葉が遮られようともつらぬきの騎士に耳を傾ける

それが桜の生存に繋がるならばと

【今より虫だけを殺し、その子供を必ず生存させる】

「虫、を……?でも……なんで、桜ちゃんを」

強い困惑と不安の混じる雁夜のか細き声に

男性と女性の声が重なる奇妙な声色は無感情に述べる

【解せぬだろう、信じられないだろう……】

だからこそ令呪を使い、違わぬように命じろ】

桜の心臓部を狙いを定め

細く長大な直剣に青白く光る輝きが流れ伝う

その様に雁夜は目を見開き、明らかな動揺が現れ

緊張は更に高まり動悸や呼吸が荒くなつていく

「俺は、お前に恩義を感じている……!!」

令呪を使わずとも俺の為に行動して仮にも臓硯を葬った!」

剣を輝かせる青白い光りが一瞬、ざわりと波打つ

「半信半疑に思ってる……お前が、剣を持って構えても

まだ俺は助けてくれるなんて思ってる……それでも」

雁夜は握り締めた拳を顔の近くにまで上げて

刻まれた三つの模様、令呪を見せて大きく叫ぶ

「それでもやるなら、お前に令呪を使う！」

つらぬきの騎士は桜を視線に捉えたまま領き

雁夜は

「令呪をもつて命ずる！いま、全霊をもつて!!」

誰かが嘲笑う瞬間、それは――

「間桐桜だけを救え!!!」

音もなさず、既に間桐桜の心臓を――

嘲笑うより早く、それを――

つらぬいていた

「――あ」

気づく頃、つらぬきの騎士は剣を桜から離しており

剣先に刺さる親指ほどの肉塊から一滴の血が落ちる時

倒れる桜を雁夜が優しく受け止め

傷から服を伝って広がる赤い色に心が震えた

「バーサーカー!!出血がッ！」

【いま】

雁夜が目を向けるとつらぬきの騎士の左手には

不思議な光りが生じていた

【治す】

それは手の輪郭が見えなくなるほどの強い光りであるのに

目は眩まず、沁みる熱もない、しかし暖かさが思い起こされる

誰も傷付けない優しいものだと思えた

その光りを伴った手は桜の体になんの抵抗もなく通り

手が引き抜かれると同質の光りが体全体から満ち溢れた

数秒経つと光りは消え、穴の空いた服の部分からは

傷痕や血痕すらも残らない綺麗な肌だけが見えた

とても喜ばしい、泣いて喜んでしまいそうなほどに

・・・しかしまだ純粹に喜んではいられないと

雁夜は再び気を引き締める

【雁夜】

「ああ、わかつてる」

そうやって雁夜はつらぬきの騎士が持つ

劍の先に刺さった親指ほどの肉塊を見つめる

「なにか言いたい事はあるか、臓硯！」

「……カ……リ、ヤ」

とても掠れた声ではあるが、それは紛れもなく  
臓硯の声であると雁夜にはわかっていた